関連学会印象記

1992年アメリカ麻酔学会（ASA）印象記

岡田和夫*

ASA は毎年一万人以上の参加者のあるマンモス学会であるが，去年のサンフランシスコの学会には1万6千人余が集ったとのことである．今年は10月17日から21日までニュー・オルリンズで開催された．ここのコンベンション・センターは広大で日本では比較できる施設はないと思える．写真1はその入口の写真を示した．3年前ぐらいから ASA の傾向が変り臨床重視の姿勢から基礎的研究も積極的に採用するようになったとのことであるが，この影響か日本人の ASA に発表したいという熱意が高まったためか日本からの演題が非常に増えているのが目立った．

最初の2日間はリフレッシャー・コースでこの内容をまとめた本が毎年出版され，日本の医局で抄読会などでかなり利用されているときいている．今回のリフレッシャー・コースも2日間びっしり午前3単位，午後3単位でしかも同時に7会場で開催されるので同じ時間帯に聴きたい内容があるとどちらを選ぶかに迷うことがあった．びっしりとこの入場チケットを購入したので次々と会場を移動して聴くはめになり，あわただしい2日間であった．これは筆者だけでなく多くのアメリカ人も体験したことであるが，人気のある講義は売り切れになっていた．

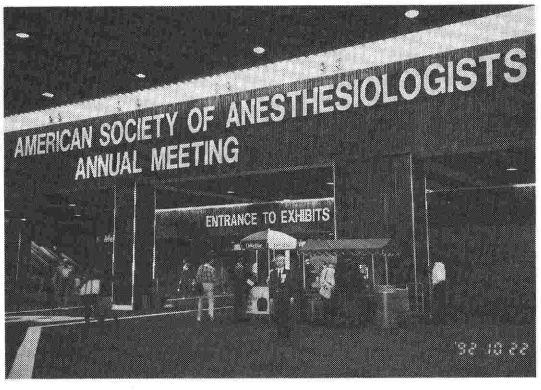

写真1

日本の麻酔学会でこれだけの幅広いテーマをまとめて行うことは未だ未だの感がするが，一つ一つをとると玉石混淆であったが，up to date の内容を50分という時間内でまとめて，聴衆に分り易く講義してくれたのには感心した．

心臓麻酔，心疾患患者の周術期管理，循環系モニターの進歩など循環系シリーズには人気が集まっていた．小児，新生児麻酔，老人麻酔，硬膜外，脊椎麻酔，などの他に鎮痛薬を含めた鎮痛，除痛対策がいろんな分野からとりあげられていた．脳保護，脳外科患者の輸液，術中腎保護などを聴いたが，わかり易くしかも中味が充実しているのをひしひしと感じた．心肺蘇生のスタンダード・ガイドラインが変ったことを紹介したハワイ大 Montgomery 教授の講義は，アメリカの方式をスタンダードにしている本邦の心肺蘇生法にも今後大きなインパクトをあたえる内容であった．心肺蘇生法の病態生理にもとづいた非常に内容豊かな発表であった．本稿が出版されてる頃には JAMA[1] にこの最新改訂版が出版されてると思う．"New cardiotonic drugs" は phosphodiesterase-III 抑制薬，β_2-刺戟薬の dopexamine が主であった．日本麻酔学会の English session で当教室が発表した肺高血圧モデルでの成績が引用してあり，これが独特の肺血管拡張作用があることを示した貴重なデーターとして紹介された．

Kaplan が"心臓外科の state of the art"について，Gallagher が "New developments in ARDS" を clinical update program として研究発表日のランチオン・セミナーの時に講演した．

*帝京大学医学部麻酔科

Presented by Medical*Online

ARDS を Systemic inflammatory responses syndrome としてとられることからはじめて，acute exudative phase, proliferative phase とステージを分類して cytokine の関与，mitric oxide の消長など非常に興味深く聴けた．いづれも ASA のリフレッシャー・コースとして日本でも入手できるので医局の勉強会などに利用して決して損にはならない内容だと思う．学会で直接聴くことは本からの知識以上の大きな印象をうけるが，これがあるからこそ遠い地にまで出かけていくのではないかと自己満足をかねてその意義を考えている次第である．外傷時の気道確保，ファイバースコープによる気道確保はリフレッシャー・コースでとりあげられてる他にこの講習会とも云えるワークショップが3会場で朝から夕方まで開催されていた．一般演題が口演，ポスターの他に poster-discussion のセクションに分けられて1200題余になっているので，すべてに気をくばるのは物理的に不可能である．

日本からの演題も多くなったが，この傾向はこの2，3年著じるしいとのことであった．写真2は帝京大の大村教授，稲田助教授のポスターの発表の場の状況である．外国殊にアメリカの最も権威のある学会で堂々と発表するには内容の立派な点も必要だが，質疑応答もきちっと行なえるという点も大切だと思う．英語が母国語の国で発表するのであれば当然のことだが，日本の若い人がその線に沿って成長しているのも事実で心強く感じた．パネルがまとまったテーマで討論されるのでなるべくこれを集中的に聴いたが，悪性高熱，ARDS 管理の new directions (Zapol の nitric oxide 吸入療法，Pearl の抗メデエイター療法）を19日午前，午後は "AIDS-Into the 21th century" も魅力があったが基礎的テーマの "Control of vascular tone" を聴いた．日本でも学際的集会があり個々のテーマは聴くことができるが，これは非常に興味ある内容がまとめられていた．ロンドン大解剖学の Burnstock 教授が "Integration of factors of vascular tone" を，"Role of endothelium: EDRF, No, etc", "Neuronal control of blood flow", "Ion channels in vascular smoth muscle: physiology and pharmacology", "Modulation of contractile protein in vascular smoth muscle: Integration of modulatory factors and summary" が麻酔学，生理学の教授から発表された．麻酔学は臨床の中で薬理，生化学などの幅広い研究分野が開かれた学問とかねて思っていたが，この会合をみて麻酔学の研究の深さをかいまみせられた感がした．ASA のレジデントのリサーチ・コンテストで2位，3位になった発表の first author が日本名になっていたが，二世か日本からの留学生かは不明だが，日本人のアビリティが示されたのでないかと鼻高く感じた．時代を感じさせられたイラクの湾岸戦争の体験をまとめた "Anesthesia in military medicine: The desert storm experience" のパネルが同時に開かれたが割愛せざるをえなかった．20日の午前は "Neurological critical care-An update" のパネルを聴いたが，くも膜下出血，脊髄損傷の治療，心肺脳蘇生などで NMDA-拮抗薬，白血球の悪影響から抗白血球モノクロナール抗体の研究，局所低体温療法，メチルプレドニソロンの有効性などがよく理解できた．ブドウ糖輸液が ischemic brain damage を増悪させることへの注意が喚起された．脳蘇生では before the insult, during the insult, after the insult で対応が異なるし，急性低 Na 血症の発生の対策には重曹注入が有効であるとした点も興味深かった．

写真2

脳モニターとして近赤外線法も発表されていたが，筆者らが日本で行っている研究の方が基礎的裏付けがしっかりしているとの自信が持てた．

午後は "History of resuscitation" のパネルがあり古い歴史から脳死，生命維持装置の限界にわたるテーマがあり興味があったが，"心疾患患者の非心臓手術" のパネル，Neuroanesthesia

Presented by Medical*Online

Research" のパネルをはしごしてきいた．脳蘇生の問題にかなりの関心が集まり，未だ未だ追及すべき点があることを病態生理面からの説明をあちこちの会場できいて強く印象づけられた．21日の午前は Update on ACLS (advanced cardiac life support) のパネルをきいたが，global ischemia の脳保護，$NaHCO_3$ は有用か？ エピネフリンの大量投与は有効か？ CPR のメカニズムと興味あるテーマであった．エピネフリンに関しては double-blind multi-center study で生存率，脳機能の回復度には差がなかったことなどが印象にのこった．これらはしかるべきジャーナルに発表されたか，今後されることになっている由であった．癌性疼痛，慢性痛などへの麻酔科からのアプローチのパネルもあったが，こちらは日本での方が一歩先んじていた分野であるが，筆者は参加しなかったので，どんなレベルの発表があったか不明である．小児輸液のリフレッシャー・コースは比較的日本で聴けない主題だったが，"ため" になる点が多々あった．

以上筆者自身の興味を中心に学会をきいたが，アメリカの国力というものに非常に大きなインパクトを受けたし，麻酔科医の層の厚さには嘆息が出るほどであった．筆者は近赤外線による脳チトクローム測定の基礎的発表を口演したが，アメリカでの Somanetics 社の装置による発表が直前にあった．聴衆に比較される羽目になったが日本がここでは advanced であったと誇りに思った．

学会で出あったアメリカで麻酔科医として成功した何人かが日本人との会合で新しく臨床に使用されはじめたプロプオフォールがすばらしい薬で，何故かとの質問に患者，術者が非常に気に入ってくれるし，麻酔科医も当然有益だと高く評価しているとのことである．セボフルレンがアメリカでは非常に興味をもたれていることも非常に印象に残った．これからアメリカでは研究，臨床両面で爆発的な進展がみられるのではないかと思う．展示場は毎年相変らず新製品が登場することで興味が持たれているが，今年は動脈カテーテル留置により血管内センサーから直接連続的に血液ガスをモニターする装置が3社から展示してあった．これも近く本邦に上陸することであるが血栓形成の有無．測定値の安定性，操作上の問題点などが解決されたなら手術室だけでなく ICU などで有用な器具になると思われた．

文　献

1) JAMA: **268**: 2171～2299, 1992.

Presented by Medical*Online